

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～8）に答えなさい。

赤ちゃんが誕生の時から人への強い関心を示すことは先に述べました。人的刺激の I 好みに始まり、自分を見ている人の顔や応答的な人への選好、他人の見ているものを自分も見ると共同注視などが矢継ぎ早に生じます。それは無力で誕生した赤ちゃんの生存と成長のための安全装置で、進化的基盤をもっているのです。

感情の発達も人的刺激への敏感さの延長です。喜怒哀楽と恐れ、嫌悪の六種の感情はごく幼いうちから備わっています。これも自力では何もできない赤ちゃんの生命を守るための安全装置です。その後、他者との関係が増える中で、同情、共感、傲慢、恥、困惑、自尊心、誇り、罪悪感、嫉妬など、複雑な感情が増えてゆきます。

赤ちゃんならずとも、人間は一人では生きられない社会的動物です。脳の大きさは動物の社会的対人能力と対応していますが、捕食、分配、調理、住居、一夫一婦制など複雑な社会生活を開発し巧く対処してきた人間の社会的対人的能力は、人間の破格に大きい大脳新皮質を基盤としています。 a、大脳のことは社会脳ともいわれます。

(1) 感情の種類が増加以上に重要な発達は、他者の感情がわかりそれに共感することです。寒い、おいしい、お母さんがいなくて怖いなど、自分についての感情はごく初期から生じますが、他の子が泣いているとつられて泣く、母親がにこにこしていると安心して遊ぶなど、他者の感情に対する感情的反応は、感情というものを（自分だけでなく）他者ももっていることに気づく——これを「心の理論」といいます——ことが大前提です。

感情は他者にもある、しかも自分とは違うこともあるのだということを理解するには、直接みることができません。感情は他者にもある、しかも自分とは違うことと衝突や思いがけない相手の反応などを経験する中で、そうか！ と他者の心／感情を発見し、自分とは違う他者の心の理解へと向かいます。

動物も他個体の感情に反応しますが、それは自分にとっての危険信号である不快感情に限られます。人間は違います。「心の理論」を獲得した子どもは、他者の快の感情も不快の感情も察知し、それを受け止めて行動します。もらい泣きをする、泣いている子を慰める、自分のことのように喜ぶといった行為は、他者の感情の理解に留まらず他者と感情を共有する、共感と共同の行為です。この「他と共に」という特性は社会的人間の必要から生じたものですが、同時にそのこと自体が人間にとって快の体験でもあります。それゆえに、人間には多様で強固な対人関

係が生まれ存在しているのです。

この共感の発達は自動的に生じるものではありません。苦楽悲喜こもごも多様な体験をもつことが必要です。自分が経験しない感情を理解し共感するのは難しく、これは子どもでもおとなでも同様です。

感情の発達はその表現法にも生じます。不快なことに出会っても、怒りや嫌悪をすぐ表情や言葉で表さずに抑制するようになりますが、これも「心の理論」によつています。自分の感情表出が他者の心に与える影響を知るからです。おとなでもすぐキレる、手が出る、有頂天になるなど、他者の心を理解しない、いわば「心の理論」の不在かのような人は少なくありません。

幼少期に頭では「心の理論」を理解していても、それがいつもうまく作動するとは限りません。自分とは違う多様な他者との出会いや自他の衝突や解決体験の積み重ねが必要です。何事も自分中心で済んでしまうような偏った人間関係は、「心の理論」は頭の中にあるだけでスイッチオフの状態になっています。「心の理論」の作動不全、一種の発達障害といえるでしょう。ものの豊かさ、通信手段の変化、少子化など発達環境の変化が、子どもにもおとなにも多様な対人体験や自己抑制の機会を乏しくしていることは無視できないようです。

b、感情の表出については文化差があります。日本人、イギリス人、イタリア人の喜び、驚きなどの表情写真を見せてどんな感情かをあてさせる実験で、日本人の表情が最も理解されにくく、当の日本人さえも正答率は低いのです。日本には感情を顔に出すのはよくない、つつしむべきだとのアンモクのルール（感情表出の規範）があるからです。

感情表出はジェンダーとも関係しています。「感情的」はしばしばよくない特徴とされ、特に男性の感情表現は冷静さやイゲンを欠くとみなされます。（武士は）「歯をみせてはならぬ（＝笑ってはならない）」は今も死語ではありません。他方、女性の感情表現には寛容で、「笑顔がいい」「愛嬌がある」は褒め言葉、泣くことさえも許容されます。このように感情表出ルールに男女差があり、それが感情行動の男性と女性の違いを生んでいます。

他人の感情を敏感に察知して対応する、他方、自分の感情を適切に表現する／抑制するという感情制御の能力は、社会性の発達の重要事項ですが、この感情制御がうまくできない発達障害——アレキシサイミアが増えていることが最近注目されています。（2）この障害は男性に多く、「男らしく」というジェンダー規範と関係しています。強さ、理性的、**II** などの「男らしさ」ジェンダー規範は親のしつけや教育、さらにはメディアによって伝達される

ものです。この、男性ジェンダーにこだわり、「男らしさ」に囚われたり混乱している男性に、感情制御の問題がありアレキシサイミア傾向が強いのです。そして自尊感情も低いのです。冷静さ、理性的、独立的などの男性ジェンダー規範に囚われている結果の感情の発達障害、男らしさの病といえましょう。

先の研究結果にもみられたように、日本人の感情は表情からは理解しにくいので、内側を察することが必要になります。それが嵩じて「空気を読む」ことが大事とされ、KYだ⇨空気を読む能力が乏しいと非難されもします。このことは日本人の心理に微妙にしかし深く浸透しています。

日本人が「頭がいい」人とみなすのは、単に知能の高さや知識の豊富さなど狭義の知の能力ではなく、「察しがいい」「気がきく」「分を知る」など他者への配慮と自己抑制ができることが「頭がいい」の重要な要件でした。「空気を読む」「他者への配慮」は日本人の行動の核ともいえる特徴なのです。

社会的動物である人間に他者への配慮や他者との協調は不可欠です。c 「KY⇨空気が読めない」を問題視し、場の空気や他者の思惑を優先して自分の感情や意思を押し殺してしまうのも問題です。過剰な他への配慮や同調は無理があり、自尊感情の低下やうつを招来します。d 無気力や自暴自棄に陥る危険性を孕んでいます。

人間は、「他者からいわれたから」「皆がするから」「ほめられるから」と他律的に行動するだけの動物ではありません。アメとムチで訓練される動物とは違います。自分の意思や目標に基づいて、自分の行為を方向づけ進めていく自律的な動物です。この自律性と他者への配慮や協調が排他的ではなく、対人行動と個人の発達を円滑に進める⁽³⁾車の両輪になっていることが重要なのです。

感情の発達として注目されるのは加齢にともなう変化です。自分の人生を回想する語りの中で現れる感情体験を、喜び、楽しさなど肯定的感情と、悲しみ、苦しみ、嫉妬など否定的感情に分けてみますと、加齢とともに

X ようになっていきます。この変化は程度の差はあるものの、日米に共通して見られます。

高齢者は自分史を語るインタビューの中で、異口同音に「五〇歳を過ぎた頃から人の気持ちが変わるようになり、自身の怒りや恨みなどの否定的感情を制御できるようになった」と述べています。否定的体験や感情をただ抑圧しているわけではありません。やせ我慢やトウヒとは根本的に違います。ネガティブなこと・些細なことへのこだわりを捨てる、そしてポジティブなものに眼を向ける、そうすることで他者を傷つけず自分も心安らかでいられることを知っての、

Ⅲ な情動選択です。対人カットウをプラスに転化させる高齢者の感情の成熟で、イギリスの作

家フオースターが老年の知恵を「寛容性」と述べていることに通じるものでしょう。

e 加齢にともなう変化には、自分の人生の持ち時間を意識することも与あずかっています。そう長くはない自分の未来を意味ある心地よいものにしたいの、感情の自己制御です。ある高齢女性は、以前好きだった刺激や興奮一杯の悲劇や深刻な映画や本はもうみたくない、「心暖まるもの」をと述べています。限られた時間を穏やかにポジティブに生きようとの自己制御の一例です。

(柏木恵子『おとなが育つ条件——発達心理学から考える』より)

問1 カタカナで書かれた傍線部ア～オのうち、次の二重傍線部に当たる漢字として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 5

| | | | | | | | | | | |
|--|------|------|-----|-----|------|--|--|--|--|--|
| | ア | イ | ウ | エ | オ | | | | | |
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | | | | |
| | アイラク | アンモク | イゲン | トウヒ | カトトウ | | | | | |
| | （① | （① | （① | （① | （① | | | | | |
| | 愛 | 按 | 異 | 避 | 当 | | | | | |
| | （② | （② | （② | （② | （② | | | | | |
| | 相 | 暗 | 畏 | 被 | 藤 | | | | | |
| | （③ | （③ | （③ | （③ | （③ | | | | | |
| | 会 | 安 | 偉 | 否 | 頭 | | | | | |
| | （④ | （④ | （④ | （④ | （④ | | | | | |
| | 哀 | 案 | 位 | 非 | 踏 | | | | | |
| | （⑤ | （⑤ | （⑤ | （⑤ | （⑤ | | | | | |
| | 合 | 闇 | 威 | 飛 | 闘 | | | | | |
| | ） | ） | ） | ） | ） | | | | | |

問2

本文中の a ㄱ e ㄴ に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は a ㄱ 6

b ㄴ 7

c ㄷ 8

d ㄹ 9

e ㅁ 10

① そこで

② このような

③ さらに

④ ところで

⑤ けれども

問3

本文中の I ㄱ III ㄴ に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は I ㄱ 11

II ㄴ 12

III ㄷ 13

① 積極的

② 自動的

③ 視覚的

④ 能動的

⑤ 内向的

問4 傍線部(1)「感情の種類が増加以上に重要な発達は、他者の感情がわかりそれに共感することです」とあるが、「他者の感情がわかりそれに共感すること」がなぜ必要なのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 14

- ① 人間は一人では生きられない社会的動物であるため、自分とは違う他者の心を理解し、他者の快の感情も不快の感情も察知し受け止めて行動し、共感と共同の行為を行うことで、多様で強固な対人関係をつくることができるから。
- ② 感情は他者にもある、しかも自分とは違うこともあるのだということを理解することが、他者との衝突を回避することにつながり、自分にとっての危険信号である他者の不快感情を察知することは自分にとっての快の経験となるから。
- ③ 人間は誕生の時から人への強い関心を示し、生存・成長するために人の顔や応答的な人への選好、共同注視などを早いうちから身につけるが、成長と共にさらに複雑な社会生活を開発し巧く対処していくための対人的能力を身につける必要があるから。
- ④ 人間は「心の理論」を獲得し感情というものを他者ももっていることに気づくことによって、他者の感情に対する感情的反応を示すようになるが、他者との共感の発達は自動的に生じるものではなく、多様な体験をもつことが必要であるから。
- ⑤ 人間の自分についての感情はごく初期から生じるが、他者の感情に対する感情的反応は「心の理論」を獲得することが大前提であり、特に他者と感情を共有し共感する能力を身につけなければ、人間は生物学的に動物として存在できないから。

問5 傍線部(2)「この障害は男性に多く」とあるが、その背景として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

| |
|----|
| 15 |
|----|

- ① 女性の感情表現は「笑顔がいい」「愛嬌がある」と肯定的に受けとめられる一方で、男性の感情表現は「冷静さを欠いている」などと否定的に受けとめられるため、女性に対する感情を抑制できずに爆発させてしまう男性が特に多い傾向にあること。
- ② 男性は常に笑ってはいけないことを強要されるうえ、女性のように笑うことで「笑顔がいい」「愛嬌がある」と許容されることがないため、笑うことで自分の感情を適切に表現することができない男性が多い傾向にあること。
- ③ 男性は日頃から「感情的」になることを抑えているため、いくら「心の理論」を理解していても自分の感情表出が他者の心を与える影響を知ることができないことから、男性の感情制御能力は発達しにくく、すぐにキレたり手を出してしまう傾向にあること。
- ④ 感情を表出しすぎることとは、男女ともにしばしばよくない特徴とされるが、女性の感情表出に対しては寛容である一方で、男性については許容されないことが多いため、「男らしさ」の規範に囚われた男性が感情をうまく制御できなくなる傾向にあること。
- ⑤ 「男らしさ」というジェンダー規範は親のしつけや教育、メディアの伝達によって伝達されるものであり、男性は女性よりもそれらに接する機会が少ないため、ジェンダー規範に従って感情抑制しようとする男性は女性より少ない傾向にあること。

問6 傍線部(3)「車の両輪になっていることが重要なのです」とあるが、これはどのようなことを意味しているか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 16

- ① 社会的動物である人間にとって、他者への配慮や他者との協調は不可欠なので、自分の感情や意思を押し殺して場の空気や他者の迷惑を優先することが重要なのだということ。
- ② 他者の感情に従属しようとする他律的な行動と、自分の行為を自分の意思で方向づける自律的な行動を、バランスよくとることが重要なのだということ。
- ③ 人間にとって、他者への配慮や他者との協調を優先するということと、自分の意思や目標に基づいて自分の行為を方向づけて進めていくということのつり合いが、重要なのだということ。
- ④ 他者への配慮と自己抑制ができることと、場の空気や他者の迷惑を優先して自分の感情や意志を抑えることを時と場合によって使い分けることが重要なのだということ。
- ⑤ 「他者からいわれたから」「皆がするから」と他律的に行動するのではなく、自分の意思や目標に基づいて自分の行動を自律的に決めていくことが重要なのだということ。

問7

本文中の空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 17

- ① 否定的感情と肯定的感情の区別がつきにくく感じる
- ② 肯定的感情について語っていたものが、否定的感情の語りに集約されていく
- ③ 他者の肯定的感情には敏感になる一方で、自身の否定的感情にはふれない
- ④ 表情に現れる否定的感情が多くなる一方で、肯定的感情の内容を多く語る
- ⑤ 否定的感情の語りは少なくなり、肯定的感情について多く語る

問8 本文の内容と合うものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は

18

- ① 人間は一人では生きられない社会的動物であり、成長過程で「心の理論」を習得することで他者と自分との感情の違いを理解できるようになるが、あまりに他者を優先し理解しようとすることで「心の理論」が働かなくなり、自己の感情抑制がきかなくなる場合もある。
- ② 人間は、社会的な必要性から他者の感情を理解し他者と感情を共有するようになったが、他者と感情を共有することは自分にとっての快の体験につながり、多様な快の経験をもつことが共感の発達とともに怒りや嫌悪などの不快な感情の抑制にもつながる。
- ③ 感情の表出については文化差があるが、日本人は特に表情の表出が少ないため、日本人の感情を他者が理解するには内面を察することが必要になり、結果的に日本では「空気を読む」能力の高い人が「知能が高く知識が豊富である」人に次いで「頭がいい」人だと認識されるようになった。
- ④ 人間にとって他者の感情を理解し感情を共有することは快い体験でもあるが、感情表出の規範に従って感情の表出を過度に抑制し、他者への配慮をあまりに優先させることは、自尊感情の低下やうつ、無気力や自暴自棄につながる怖れもある。
- ⑤ 感情の表出には加齢にともなう変化も見られ、高齢者は他者の気持ちがわかるようになってと同時に、自身の中に生じた怒りや恨みなどの否定的感情をうまく相手に表出させる能力を身につけ、ポジティブなものだけに意識を集中させることができるようになる。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

ヒューマン・エラーは、評価や定量化を越えたところでも起こります。そのために、どのような安全への戦略が可能か、a、システムの安全を目指すときに、それに関わる人間の意識として、何が必要か、という点に焦点を絞ってお話ししてみたいと思います。

現代社会における不安の源泉の一つは、人工物です。自然の脅威もさることながら、人間が造り出したものが、さまざまな形で人間を脅かすことになっていきます。Iに脅威を生み出すために造られた武器はもちろんですが、人間によかれと思つて造つたものが、大きな脅威となることがあります。

それは、そうした人工物つまり広い意味での機械と、人間とのセツショク面が、十分に考慮されていなかったことによるものが多いと言えます。特に、人間がときに犯すミスやエラー、それが、便利な機械を凶器に変えることがしばしばです。

まずは「フル・プルーフ」、「フェイル・セーフ」という安全戦略のイロハです。「人は誰でも間違える」可能性を持っています。使用者、利用者が、間違えることを予想して、戦略を立てなければなりません。これまた最近日本に定着した「製造物責任」という考え方があります。もともと、製造物は、消費者の手に渡った後も、製造者が応分の責任を持つべきである、というのが本来の考え方ですから、これも最近家電製品や一部の自動車などで実施され始めた、不用となったものの買取り責任、あるいは廃棄処理責任など、人工物の「ゆりかごから墓場まで」に、製造者は責任があるというのが、イ シュシなのです。

b、あの有名な事件で、もっぱら使用上の「愚行」に対して、製造者はどこまで責任があるか、というような問題に、関心が集中してしまつたようですね。そう、あの電子レンジ事件です。アメリカで、ある主婦がシャープ製の猫を乾かそうとして、電子レンジに入れた、という話です。その後の新聞報道では、どうやら、これは作り話だったようですが、しかし、この話の「教訓」は強烈でした。最近では、小さな道具を買つても、分厚い説明書がついており、湯沸しやパン焼き器のそれにも、「熱くなりますから火傷に気を付けてください」などと書いてあります。こういう類は、むしろ逆効果でさえある、と思います。結局は、誰も読まず、誰も気に留めなくなるからです。関係者に見れば、何かで問題が起きたときに、でもちゃんと注意はしてあるでしょう、と言いつつ

きる、そのためだけに、こうしたことが行われている、と邪推もしたくなるほどです。

もう一つ問題なのは、こうした「愚行」対策が、一部ではありましようが、マイナスの意味をもっていることです。「フル・プルーフ」とは、猫を電子レンジに入れて乾かそうとするような「愚行」に対して、備えることである、というような理解があることです。一部の医師は、明らかに、そのような理解をもっていることを示しました。「自分たちはフルではない」だから「フル・プルーフ」などは意味がない、という発言は、そのことを物語っています。

(1)「フル・プルーフ」とは断じてそういう意味ではありません。どれほど知識があり、どれほど高度な職能訓練を受けた人でも、自分の職能において考えられないような「間違い」をすることがある、という認識こそ、「フル・プルーフ」の本質です。

もう一つ、システムや機械を、あまりに「フル・プルーフ」にすると、利用者は安心して、注意力がサンマンになり、かえって事故が起きるのではないか、という問題があります。cこれは一面の真理を衝いています。

工場などでは、システムにときどき異常（軽微な）が起こるように意図的に仕組んで、ラインに張り付く従業員の注意力をかき立てるようにしているところもあるように聞いています。ただ、これも、慣れてしまえば逆効果で、狼少年おおかみさながら、真に対処しなければならぬ異常が起こっていても、ああいつものやつか、と放置される危険もあり、必ずしも推奨できる手段ではないようです。

ここに一般論として大事な論点があるように思います。システムのなかで、「安全」は絶対的な価値として追求されなければならないが、それで「安心」が保証されることは避けなければならない、という点です。ある組織内で、従業員の間に「安心」が広がるのが、x、と私は考えています。安全が達成され、安心が充足されたときに、安全は崩壊し始める。そう私は考えているからです。この問題はIIなものです。ある組織あるいはシステムのなかの部分組織、あるいはサブシステムにおいても、このことは成り立ちます。それがトウゴウエされた組織全体、システム全体についてもまた、このことは真だと思えます。すると、それをさらに拡大して、例えば国家や公共空間についても、同じことが言えるのでしょうか。私は言えると考えています。

身近な話ですが、今はともかく、かつて日本社会は「安心」できる社会、女性が夜一人で歩いても、あまり不安を感じることなく生きられる社会と言われていました。そうした日本人が、そうでない社会に旅行したり、移住したりしたときに、色々な不幸な事件が起きました。そういう意味では、「安心」は人々が求める重要な目標

なのですが、「安心」があるから「安心」していられるというわけにはいかない、という奇妙な逆説が存在することに気付いておきたいものです。

d もう一つ大切なことを確認しましょう。安全という概念が大切にしなければならぬ一つの価値である、ということは誰でも判^{わか}っています。このことに反対する人はいないでしょう。しかし、この価値を追求する作業を実践する、となると、必ずしもそれが第一義のものとして現れてこない憾^{うら}みがあります。(2) それはどこか消極的な価値のように思われるのです。

例えば企業の中核にいる人に訊^きいてみますと、どなたも、そりゃあ安全が大事なことは判^{わか}っていますよ、とおっしゃる。しかし、わが企業は安全をすべての価値に優先させて考える、わが企業の第一目標は安全である、というわけにはいきません、という言葉が付随するのが普通です。もちろん、建設業などで、「安全第一」をスローガンに掲げているところはたくさんありますが、それでも、その裏には売り上げや効率が落ちては元も子もない、という発想が見え隠れしています。

確かに、企業である限り、利益を上げることが最優先課題である、というのは正しいように思われます。それが株主に対する義務でもありましょう。しかし、ことは逆ではないでしょうか。安全が欠けていたら、それこそ元も子もない、ということは、最近のさまざまな企業の安全を巡る不祥事が教えてくれています。ここで言う安全とは、企業活動の結果としての消費者や利用者の安全と、企業内での従業員や施設の安全の双方についてのことです。

実際企業内で起きた火災が、従業員を死に追い込むばかりでなく、周辺一般の公衆にも多大の損害を与えることもままありますし、原子力関連企業のように、企業内安全の不徹底が、外部にある程度の放射線被^ひ曝^{ばく}をもたらした例もあります。

e、厄介なことには、安全対策を完備すればするほど、安全への^まインセンティブが低下する可能性を否定できないことです。組織体が安全に運営されているときこそ、一層安全への配慮と対策の維持・強化が必要なのですが、安全はともすれば、それにかかっているコスト（何も資金だけを言うのではありません、この言葉で、**Ⅲ**な資源や、それに費やされる能力、努力などすべてを指しておきましょう）を忘れて、まるで空気か水のように、「当たり前」と見なされる傾向があります。

私は「安全が達成された瞬間から、安全の崩壊は始まる」と言うのですが、安全が当たり前のことであればある

ほど、なお安全へのインセンティブを自らのなかにかき立てなければならぬのです。これは、言うは易く行うに
 難いことでもあります。そのためには、外部からの規制的な刺激（例えば定期的な報告書の提出が義務付けられる、
 あるいは定期的な外部カンサを受ける）なども、万能ではありませんが（それもまたしばしば慣れのなかで、ある
 いは狎れのなかで、形骸化することは、色々な事例の教えるところですが）、一つの方法としてある有効性は持っ
 ています。

（村上陽一郎『安全と安心の科学』より）

注1 「フール・プルーフ」、「フェイル・セーフ」——ヒューマン・エラーが生じたとき、悪い結果を起させ
 ないような対策に関する、「フール・プルーフ (Fool-proof ミスをカバーできる)」、「フェイル・セー
 フ (fail-safe ミスがあつても安全)」の仕組み。

注2 インセンティブ——やる気を起こさせるような刺激。動機付け。

問1 カタカナで書かれた傍線部ア～オのうち、次の二重傍線部に当たる漢字として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

19
 ～
 23

| オ | エ | ウ | イ | ア |
|-----|------|------|-----|-------|
| 23 | 22 | 21 | 20 | 19 |
| カンサ | トウゴウ | サンマン | シュシ | セツシヨク |
| (1) | (1) | (1) | (1) | (1) |
| 詐 | 当 | 慢 | 旨 | 職 |
| (2) | (2) | (2) | (2) | (2) |
| 査 | 等 | 漫 | 志 | 殖 |
| (3) | (3) | (3) | (3) | (3) |
| 作 | 統 | 満 | 詞 | 色 |
| (4) | (4) | (4) | (4) | (4) |
| 差 | 踏 | 万 | 思 | 触 |
| (5) | (5) | (5) | (5) | (5) |
| 鎖 | 到 | 萬 | 伺 | 拭 |
| () | () | () | () | () |

問2

本文中の a ⅰ e に入る語句として最も適切なものを、次の①ⅰ⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。
解答番号は a ⅱ 24 b ⅱ 25 c ⅱ 26 d ⅱ 27 e ⅱ 28

- ① ここで
- ② しかし
- ③ その上
- ④ 確かに
- ⑤ また

問3

本文中の I ⅰ III に入る語句として最も適切なものを、次の①ⅰ⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。
解答番号は I ⅱ 29 II ⅱ 30 III ⅱ 31

- ① 意図的
- ② 客観的
- ③ 構造的
- ④ 人的
- ⑤ 二次的

問4 傍線部(1)「フル・プルーフ」とは断じてそういう意味ではありません」とあるが、筆者がこのよう

に言う理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

32

- ① 「フル・プルーフ」とは、使用者が使用上考えられないような「愚行」をすることへの対策をとるための考え方であることはもちろん、知識があり高度な職能訓練を受けた人でも考えられない「愚行」を犯す可能性をも含めた考え方であるから。
- ② 「フル・プルーフ」とは、「人は誰でも間違える」可能性を持っていることを予想した上で対策を立てるための考え方であるが、製造物の使用者が間違いを犯したことについての責任は、そもそも使用者ではなく製造者にあるから。
- ③ 「フル・プルーフ」が「愚行」に対する備えだという理解は誤りであり、そもそも猫を電子レンジに入れて乾かそうとするような「愚行」は想定範囲外のことであり、「フル・プルーフ」にもとづいた対策によっても防ぎようはないから。
- ④ 「フル・プルーフ」の考え方において、知識や高度な職能訓練を受けていない使用者や利用者に対する備えという認識はなく、知識があり高度な職能訓練を受けた使用者や利用者が「間違い」をするということを確認としているから。
- ⑤ 「フル・プルーフ」とは、「人は誰でも間違える」という可能性に従ってヒューマン・エラーに対する戦略を立てようとする考え方であり、自分は「愚行」など犯さないと考える知識や高度な職能を持つ人が「間違い」をすることを対象とする考え方だから。

問5 本文中の空欄

| |
|---|
| X |
|---|

 に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

| |
|----|
| 33 |
|----|

- ① 「危険」と「安全」が崩壊を始める
- ② 最も「安全」であり、かつ「危険」でもある
- ③ 「安心」の価値が最も高まる時である
- ④ 「安全」が「危険」を凌駕する絶好の時である
- ⑤ 最も「危険」だとさえ言える

問6 傍線部(2)「それはどこか消極的な価値のように思われるのです」とあるが、何をもって筆者は「消極的」

と述べているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 34

- ① 安全という概念が大切にしなければならぬ一つの価値であるということは一般の人々ならば誰でも判っているが、企業にその考えはないため安全対策を十分にとらず、売り上げや効率、利益を上げることが最優先課題として取り組んでいる現状があると筆者が考えていること。
- ② 企業の中核にいる人は売り上げや効率、利益を上げることが最優先課題として考えているため、安全をないがしろにする傾向があり、安全を巡る不祥事を起こすことで、結局株主に対する義務をも果たしていない現状があると筆者が考えていること。
- ③ 安全という概念に大切な価値があるということは企業も判っているが、安全対策を売り上げや効率、利益と同等の扱いにしてしまっているため、安全という概念が第一義のものとして現れていない現状があると筆者が考えていること。
- ④ 企業の側も、安全という概念を第一義のものとして価値を追求すべきだということは判ってはいるものの、実際には売り上げや効率、利益を最優先課題として捉えるため、安全対策を第一目標とできていない現状があると筆者が考えていること。
- ⑤ ほとんどの企業が「安全第一」をすべての価値に優先させている一方で、一部の企業は売り上げや効率、利益を最優先課題として安全を二の次にしており、安全を第一義として取り組む姿勢が企業全体に浸透していないという現状があると筆者が考えていること。

問7

本文の内容と合うものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は

35

- ① 人間が造り出した人工物は、脅威を生み出すために造られた武器だけでなく、人間によかれと思っ
造ったものでも人間にとって大きな脅威となることがあり、一つの例として、人間が正しく機械を使用し
ていたときですら発生する機械のエラーによる誤作動が挙げられる。
- ② 「製造物責任」という考え方にもとづいて、最近では小さな道具にも分厚い説明書がついており、必要以
上に詳しい説明が書かれているが、結局そのような説明書は誰も読まず気にとめなくなるため、ヒューマ
ン・エラーの対策としてはむしろ逆効果だとすら言える。
- ③ システムや機械について、あまりにミスをかバーできるようなシステムにすると、利用者は安心して
注意力を働かせなくなり、かえって重大な事故につながる恐れもあるので、ときどきシステム異常を起こ
すような構造にして、利用者の注意を喚起することが必要である。
- ④ 人々が安心に満たされたときに安全が崩壊し始めるということの例として、かつて女性が夜一人で歩
くことができるほど「安心」できると言われた日本社会に住む日本人が、外国で「安心」を失った結果、
不幸な事件が起こってしまったことが挙げられる。
- ⑤ 安全対策を完備すればするほど人々の安全に対する認識が低下し、全く安全対策をしない状態よりも
危険が増すという現状があり、安全を「当たり前」と見なすことを防ぐことが重要であるが、内部だけで
対策を行うことは困難であるため、外部の力を借りることは一つの方法として有効である。